

「新しい東北」官民連携推進協議会
令和4年度 福島県意見交換会（第3回）議事概要（公開用）

令和5年3月1日
「新しい東北」官民連携推進協議会事務局

【日 時】令和5年3月1日（水）13:00～15:00

【場 所】復興庁福島復興局／オンライン

【出席者】（敬称略）

＜副代表団体＞（所属の五十音順）

株式会社東邦銀行／福島県／国立大学法人 福島大学／一般社団法人 ふくしま連携復興センター

＜主団体＞（所属の五十音順）

株式会社 J ヴィレッジ

＜オブザーバー＞

一般社団法人 まちづくりなみえ

＜復興庁＞

復興庁 復興知見班／復興庁 福島復興局

＜事務局＞

株式会社 J T B

【議事概要】

1 開会

復興庁より、実践の場において若い方たちが熱心に議論し提案したプログラム案について、協議会として次年度にどのような形でつなげていけば良いか、忌憚のないご意見をいただきたい旨、挨拶した。

2 各団体の活動紹介

各参加団体より、取組み紹介資料（資料2-1～資料5）をもとに取組みを紹介した。

3 実践の場の開催結果を踏まえた意見交換

(1) 今年度の実践の場で提案された各チームのプログラム案を次年度どのように具体化できるか

実践の場で提案された3つのチームからの提案については、それぞれが素晴らしい視点を持っているものであり、次年度の実現に向けて意見交換を進めていく方向性が確認された。この際、どれか1つを選んで取り組むのではなく、それぞれの案の視点や想いを活かせる方法で実現を目指していくのが良いとの意見が得られた。また、Aチームの案については、復興庁の事業、J ヴィレッジや大学等のイベントなど、様々な場で行ってみるのはどうかとの意見も示された。さらに、実践の場に参加し、プログラムの提案を行ってくれた学生・社会人には、来年度も引き続き何らかの形で関与してもらいたいとの意見が挙げられた。

(主な意見)

- ・今までに思いつかないような提案をいただき、大変有意義な会議だったと思う。J ヴィレッジとしては今後、「交流人口の拡大」が一番の大きな目標なので、J ヴィレッジが主体となって、意見をいただいたものを実現化に向けて進めていかなければならないと思っている。人口減少や高齢化な

ど様々な問題があるが、学生の皆さんにヒントをもらった。皆さまと協議をして、Jヴィレッジのみならず福島がどうやって盛り上がっていくか。「浜通りではなく、福島全体を」という言葉もあったので、その実現化に向けて意見を出し合いながらやっていきたいと考えている。

- Jヴィレッジが再オープンしてから、スポーツ以外の団体にも来てもらえるようになり、状況がだいぶ変わってきている。近隣住民の“学び舎”的なこともやったりしている。企業研修が多くなってきている。あとは修学旅行など教育団体。コロナ禍ではあるが、方面を変更して弊社に宿泊していただき、震災学習プログラムを体験していただく方は徐々に増えつつある。企業研修は視察もセットだ。
- Aチームは「ふるさと」というものに対して、ふるさとに戻るか戻らないか選択しどちらかを排除するというのではなく、「ふるさと」を尊重しながら共有していく。福島県という状況を見ると、そういうアプローチは大事な視点だと思う。2011年の夏に「失われたふるさと」に対してどう思うかをみんなで共有するワークショップに参加した。12年が経過したところで、今度は「新しいふるさと」をどのように皆で共有していくかという、再構築みたいなどころでのふるさと論の話になる。それは共通用語として全国で「ふるさととは何なのか」を考えるという、非常に多様性を共有していくようなテーマになっていくと思う。Bチームはビジョン形成型の提案だと思う。「10年後、20年後にどのような社会でありたいのか」ではなくて、「こういう時代になっていきます」というビジョンを作って、そこに対してどういうコンセプトでどういうアプローチをしていくか。こういう発想は復興には大事だと思う。2011年の10年後のビジョンがあったのであれば、12年経過した現在からの10年後のビジョンという話は、復興というプロセスの中では改めて大事になるのではないか。Cチームは、モデル的なものをきちんと作っていきこう、実装していきこうというプロデュース型の提案だと思う。実装していかなければ具体的な問題を一つ一つ潰していくことができない。逆に「福島というところから発信できる」という大きな強みを持って望むべきという話の展開には非常に共感した。非常に有意義な提案だと思う。
- 最初はこんなに短時間で提案できるのかと思っていたが、若い皆さんが非常に熱心に集中して取り組んでくれ、どれも良い提案だった。Aチームが一番面白いなと思って見ていた。Aチームの中心は社会人の女性で、最初は「ふくしまに出会って自分の生き方を考えよう」みたいなテーマを掲げていたが、議論する中でふるさととは何か考え、自分の根っこやルーツにあるもの、あるいは自分を支えるみたいなものに辿り着いたのだと思った。これはすごくいい企画だと思う。他のイベントの中での取り組みや、散発的に各地でやってみるのがいいと思った。Bチームのアイデアは、「復興」という言葉への疑問から始まっているのがすごく重要だと思う。「復興という言葉にこだわらず、未来を考えていきこう」ということは非常に面白く、12年経った今、そういう視点もいいのではないかと聞いていた。Cチーム提案のビジョンみたいなものは、浜通りに限らず福島全域でいろいろ行われるといいと思っている。先日も相双地域支援サテライトで、富岡町でこれから頑張ろうとしている起業家をお招きして、インターンシッププログラムの中身を学生に考えてもらうという企画をやった。やはり熱いマインドを持った企業の方がいるので、そういう方と学生が会うことで化学反応が起こり、学生たちも刺激を受けていた。起業家と学生が会って一緒に議論するみたいな場になると面白いのではないかと考えた。
- 若い世代の方たち、出身者はもちろん全く福島県にゆかりのない県外の子たちも福島県のことを考え、将来について検討してくれていることをとても嬉しく思った。一方で、課題先進地である福島県の状況は、20年後、30年後には全国の至るところで起きてくるので、参加者が本県とは違う場所で生活を始めた際にも、先日、Jヴィレッジで熱心に議論していただいたことは、福島県だけでなく今後の日本の発展にもとても価値のあることだと思う。
- 次年度の事業展開の前提条件として、3チームの提案をそれぞれ全て具現化するのか、又は、その

中から 1 つ選んで具体化するのか、もしくは各チームの意見を混ぜ合わせた形で実現するのか、この整理がまず必要であると思う。私は、可能であれば全チームの参加者に新年度の事業に関わらせて、各チームの提案を実現させてあげたい。その取組の背中を押してあげるのが今回の目的なのではないかと考えている。

- 今後の展開だが、「自分もやってみたい、関わってみたい」という方がたくさん出てくるのではないと思う。動き出す際のきっかけづくりは副代表団体や参加していただいた皆様が中核になるかと思うが、もっと関わってくれる仲間を増やしていくことも重要だと思った。各地でどんどんやるというご指摘もあったし、ビジコンをやるとなればいろいろな企業の方に参画いただくことで魅力的なイベントになっていくと思う。協議会に参加いただいている企業や団体に声がけするだけでも賛同してくれる方は相当いると思うので、そういう方々を巻き込みながらやっていく。いろいろなところに展開していく動きも併せてやっていくと、より魅力的になるのではないと思う。
- 各チームで提案してくれた学生たちに、来年度は実践型として第 1 回のサミットに関与すべきではないかと思うし、関与させてあげたい。Aチームの提案に関わることで、人に寄り添う伴走型タイプの人材育成になってくるのではないかと思う。Bチームの提案に関わり、ビジョンを語るのであれば、それを語るができるファシリテーター、担い手としての人材育成となる可能性がある。Cチームの提案に関わることで、実装プロデュースの担い手、ヒューマンリソースとして成長していってもらいたいと思う。大学として 1 年生を出したのは、そうした意図もあった。このメンバーが何らかの関与をして、実行委員会形式みたいなものが形成されていき、お互いオンライン等で双方向にやり合いながら、今回不足したものをもう 1 回福島でディスカッションをする。そういう過程があつての来年度第 1 回のサミットにしたい。「彼等が作り上げた」サミットを作っていけるような道筋を希望している。その上で、我々がどう準備できるかという話をできたらと思う。
- 今年度参加してくれた若者たちについて、我々が「また来年度も関与させてあげたい」という感覚は少し違うかも知れない。彼等も就職や、プライベート環境の変化があり、今年は参加したけれども、来年度になったら忙しくて参加しませんということも当然あると思う。常に間口は広く持ってやっていくのがいいと思う。
- 参加していただいた方 14 名中 5 名は来年度社会人になり、環境が変わるので、必ず参加してくれという話ではなくてもいいと考える。年度明けか年度末に「提案していただいた話について、皆さんからさらに詳しく話を聞きたい」というところから開始してもいいのではないかと思う。その上で、この取組を実行委員会形式で学生が継続的にやっていけるのかどうか。それはここでの議論というよりは次年度の協議会・意見交換会の中での話し合いになると思う。
- 東邦銀行では、今後経営を担う次世代の若手などを募って「とうほう次世代経営塾」をこれまでに 5 回開催した。全 5 回で 150 人ほど参加されているが、彼らは交流会をしたり、各期生の会社に訪問して企業見学をしたり、いろいろな悩みを語り合ったりしていて、非常に素晴らしい人のネットワーク、情報のネットワークを作っている。県内外を含めていろいろなことを助け合う仲間になっており、我々としても非常に嬉しい。この取組も 1 回で終わらせるのではなく、2 回、3 回と継続させていくことがとても重要だと思う。今回参加した方には次回にも関与できるような仕組みを組み立てていければ、より良いものになるのかなと思う。
- こういうふるさとを入口としたプログラムは、旅行商品になるのではないか。人が集まるのか、という課題があるのかもしれないが。
- 「その地域に行ったら、あのの人に会いたい」というのは非常に強い。我々もそうで、旅行に行って誰かにお世話になり助けていただいたら、その人にお礼を言いたい。そのようなことを強く思うことが私にもある。そのような形にしていければいいのではないかと感じている。
- 人に会うというのは、お膳立てをするものではない。入口は観光旅行でもいいが、自分自身がそこ

で会った人にもう 1 回会いたいというふうに作っていかないと、本当の意味での「人に会いたい」という部分にはなっていないと思う。Aチームの提案の感情的なところ、「ふるさと感情といった部分を醸成する」といった意味では、こちらの方がひな形を作ってしまうことになってしまう。「ふるさとをどういうふうに思うか」という話も、彼らの応答のみで任せたらいいと思う。「いろいろあるんだね」ということをリスペクトしていくという話だと思う。

- ・私も問題探求型、問題関心型という形でツアーにならないかなと思っている。この事故に関して問題意識を持っている人たちを集めませんか、福島のことをみんなで考えませんか、震災からこれからの日本を考えませんかなど、いろいろな探求型のツアーは少人数でもやる価値はあるのではないかな。そういう人を連れてくるプロデューサーをこの学生たちにやってほしい。さらに言えば彼らが 1 つのキーになって長大から九州の学生に広げていくとか、東大出身の大阪の子から大阪界限で広げてもらえないだろうかとか、彼らがインターカレッジとしてのネットワークを持っていたりもする。そういう人たちに対して、旅行会社が企画して福島に参集できる窓口になっていただくことはできないのかな、と思う。
- ・一度はツアーでセッティングした出会いでも、そのツアーが終わってから「もう一度あなたに会いたい」という話となればよいと思う。個人をアイキャッチにしたようなツアーができないか。その後、最後の一言で「ふるすとは場所じゃない」と言ったら全部腑に落ちるような気がする。そういうことから自分の立っている場所のことを考える。だから、ふるさととして考えさせるというよりは、人を通して自分をもう 1 回見つめていくみたいな、そういうことができないか。それこそが福島の得た知見の発信ということになるのだろうと思っている。例えば「福島の環境を考えるツアーに参加しませんか」ということで、そこに現地のがいるということではちょっと違うと思う。「商品にしていくためには」という話なので、アイキャッチという話をした。
- ・具体的な取組内容が見えている A チームの内容について、復興庁として何ができるのかを考えてみた。復興庁では「新しい東北」に関係する取組として「Fw:東北 Fan Meeting」の場を設けており、少人数で集まってワークショップを実施している。こういったツールを活用し、「ふるさとを語り合うワークショップ」を 1 度実施し、プログラムのひな型のようなものを作り、他の団体さんがプログラムをやる際に活用いただくという形が一案としてあると思う。A チームの提案は「ふるさと」に関する議論をする内容であり、色々な人が入って来た方がいいという側面もあるが、そうは言ってもあまりに人数が多いと意見交換が進まないという部分があるので、大きなイベントでやるというよりは個別のイベントを地域で複数回実施し、議論を深めるようなことができればと思う。各会で生まれた成果を総括的に発表する場として J ヴィレッジでの来年の第 1 回の話し合いの場を活用するという方向性もあるのかなと思う。
- ・一番実現しやすいのは A チームだと思って聞いていた。復興庁のファンミーティング等の枠組みを使って A チームの提案をブラッシュアップして、ひな形として提供していく。また、大学、銀行、経営者の方も交えてやってみるなど、色々応用できるかと思っている。それを色々な場所で、他の集まりのときに不意打ち的にプログラムを組み合わせるのもアリなのかなと思う。そういうものが溜まってきたら、冬頃に総決算として参加してくれた方に改めて声掛けをし、J ヴィレッジに実際に集まって話し合う。そのときのテーマやプログラムについては、B・C チームの提案を取り込むようなものができるといい。ただ、C チームが一番練られているが、ハードルは高い。そこは副代表の皆さんからアイデアをいただければと思っている。
- ・A チームの提案について、「ふるさとについて語りたい」ということを目的に来る人たちを集めるというやり方もあるが、しかし逆に、全くふるさとについて語ろうと思っていないを集める方法もあり、その方がいろいろと気づきが多いような気もしている。復興庁がワークショップを企画すると、まさにプログラムだけをやりに来る人たちを集めることになる。一方で、全く別のイベントと

組み合わせ、そうではない人を巻き込んでふるさとについて議論していただくことができれば面白いのではないかと思います。例えばJヴィレッジでサッカーイベントがあってサッカー選手たちもいるならば、そこでの交流プログラムの中で1つこういうことをやってみる。ふるさとについて考えることを目的にしている人たちが、当初はサッカー選手との交流を目的に参加したが、実際にふるさとについて語ることで、いろいろな気づきもたらされて、その後の展開につながるようなことになればよいのではないかと。

- 3つのテーマを活かしながらといったときに、Aチームはむしろ先にやった方がいいのではないかと考えている。Aチーム3人のチームで6~7月頃に、福島でなく彼女のふるさと山形や東京でもいいので、そういう形で実現できないか。私たちが語っている部分は日本で言えば震災だが、ダム建設に伴う消滅集落など、震災に始まったことではなく、ふるさとを失った経験はいっぱいある。これからは限界集落でそういう経験が出て来る。彼らが、「我々が考えるふるさとはこういうことでした」という話をもって、福島でこのことを共通の基盤的なもの、通底するものとして考えたときに、21世紀課題を抱える福島、震災を経験した福島、これから作っていく福島について、外の人も含めて、どんなビジョンを持っていくか、どんな町がいいのか。そういうストーリーがいいかなと思う。2つめと3つめは、確かに融合させてもいいのかなと思う。・Aチームのトークフォークダンスは、いわゆるツールだ。それは少し磨き上げてやり方を考えて、「福島式」みたいな、この協議会の中で出来上がったような感じで、九州でも四国でもいろいろなところでやっているというふうにつながられるのかなと思う。
- Aチームの取組を実施する場合に、トークフォークダンスをして、「自分にとってのふるさと」を考えていただくという取組は良いと思うが、そのアウトプットをどこに求めればいいのか。参加者に「ふるさと」を考えていただくことをもって良しとするか、それとも、その先のアウトカム、新たなステップを求めるのかというところが不明確ではないか。
- Aチームの提案は、ステップ1で個人ワークをさせて、各世代、他世代と語る実践を経て、もう1回個人ワークをさせて皆で共有するという案であった。具体的にはまだ詰められていないが、最後に何らかの形で、書いたものなり作ったものが残るという前提かなと考えている。記録が溜まっていくようなものにはなると思う。
- 3つのチームすべてに「ふるさと」というキーワードが掛かっている。21世紀の日本で、東北のこの福島で、ふるさとがなくなるかもしれない人たちがいるという現実と直面した。ふるさとは何かというテーマで語られるのは、実は場所の話ではなく、その場における人と人との関係性の話。「ふるさと」を考える、語るということはものすごく大事だと思うし、これは双葉郡だけの問題ではないと感じた。日本の中で都市といたら東京、大阪、福岡など6つくらいで、他はみんな車で10分も走れば田んぼが見える田舎だ。それぞれの地域がこれから抱えていく課題が福島にあるという視点で考えると、やがて他の地域にも現れてくるだろう課題に対しての解決を考え、まさに福島が地域づくりのモデルとして発信できていくのだというCチームの提案にもつながっていく。Bチームは、主語がないというのがすごく面白いと思う。「復興って、本当にそれでいいの？」というそもそも論みたいなものは、学生たちにとっても我々にとってもすごく大事なことで、そのように構造的に物事を見ていくことは大事。つまりBの視点をもって、且つAの「ふるさと」というところに焦点化していけば、Cが目指すところにつながっていくのではないかと考えた。
- 3つの案はみんな近接している。それぞれのポジショニング、視点は違うが、重なりを見つけていくことで1つの物語になるのかなと思う。具体的にAの案を事業として展開していく中で、Cにつなげていく。つまり、地域づくりというところにつなげていく。Cのタイトルである「新しい地域づくりのモデル」を発信につなげていくということができればいいのではないかと。
- 視点としてはBの「“復興とは？”というところから」ということがある中で、Aの取組について

はできるところからやっていく。Cのビジョンについては、いろいろ課題はあるけれども、全体を通してこれを1つの流れとして、3つのどれかを選択するわけでもなく、バラバラにやるわけでもなく、1本協議会として筋を通しながら同時進行していくというイメージで捉えている。

- ・ Aチームの案と、B・Cチームの案は内容としては違うので、Aと、B・Cとを組み合わせたものを実施するというのではないか。BチームとCチームは、最終的に復興を考えるというビジョン的な話ともう少し実践的な話という内容はあるにしろ、全体の構成としては何かしらのプログラムの体験をし、そこで得たものを活かして提言やアクティビティにつなげるという内容。最終的な出口をどうするのかは、また来年議論しなければいけない。
- ・ 協議会としての制約を考えたときには、全てのプログラムをこちらで仕組んでやるというのは現実的でない。その場合、各団体さんが行っているプログラム、機会を活用する形で情報提供をして、そちらのプログラムを経験した人たちを連れて来る。そのようなやり方をしていけないと、いろいろな経験をさせるのは難しいのかなと思った。個々のアクティビティなどについては事務局から各副代表団体に照会をかけさせていただいて、副代表団体がやっているどういう取組に合わせられるかというような話ができるといいのかなと考える。
- ・ 民泊などはハードルが高いが、彼らが言っているのは「1度来てほしい」ということだけ。「1回見て、戻って、もう1回考えてまた来てほしい」という話だ。例えばトークフォークダンスに参加してくれた人、例えば福島のサッカーを見に来て参加してくれた人が、次にJヴィレッジでこれをするよというときに手を挙げてくれれば、この流れに沿うのではないか。

(2) 多様な主体間の更なる情報共有や連携を進めるために今後の協議会運営はどのようにあるべきか

次年度以降の取組において連携することが考えられる、既存の団体・取組として、福島大学の相双地域支援サテライトや地域で活動している移住定住支援関係の団体、福島県SDGsプラットフォーム等の名前が挙げられた。次年度のプログラムの実施に向けては、これらのネットワークや各副代表団体の取組との連携の方策についても模索しながら、準備を進めてまいりたい。

(主な意見)

- ・ 福島大学は福島県から事業を受託する形で相双地域支援サテライトを運営している。昨年、県の予算ということもあって特に福大生に限定せず、いろいろな大学の大学生を招いてスタディツアーを始めた。来年度4月以降も引き続きいろいろなツアーを実施する予定だ。Cチーム的なことをサテライトで一部やらせてもらうということも考えられる。富岡町は学生のインターンシッププログラムを実現するために、町の方でも予算化して、例えば東京から学生が来たときに泊まるお金を負担するとか、そういうことに取り組みされている。南相馬も、学生が泊まったりするのに町の方でお金を負担したりされていると思うので、そういうものを利用して、協議会予算とは別にいろいろ取り組んでもらうことは可能ではないかなと思っている。
- ・ 参加学生という意味では一緒の人たちをつかまえていくというのが一番いいと思うが、そこをやるには我々からも情報を流しつつ向こうからも情報をもらえるといい。市町の情報まではなかなか入ってこないの、そういった情報が集約されているプラットフォームのようなものがあるなら教えていただきたい。
- ・ 富岡町に関しては令和5年度から予算をつけてやる予定なので、まだプラットフォーム的なものはない。とみおかプラスという移住定住支援をしている一般社団法人さんが担われるので、そちらに連絡していただけるといい。
- ・ 相双地域のサテライトそのものがハブとしての役割は果たしてきたのではないかなと思う。今もとみ

おかプラスさんなど復興関係のところがやっている部分については11年間の蓄積があり、そこがハブとして情報を集約しTPOに応じて連絡を取り合っている。ただ、そのハブはいわゆるウニ型で、一方方向で針だけ出していて、針の先がネットワーク化されていない状態。その辺を上手くやればプラットフォーム化できるのだろうと思う。学生は学生でネットワークを作らなければいけないかもしれない。

- デザインセンターとしては、産業界ともつながっていききたい。経験的部分を活かして、浜通り12市町村として何か1つプロジェクトを興していくことができればいいと考えている。
- この4月には、国際研究教育機構F-REIが設立される。F-REIの第5分野に、原子力災害に関するデータや知見の集積・発信という研究開発分野があるが、そこで東北大学や宇都宮大学の先生らがコミュニティデザイン等の研究をされる取組が予定されている。F-REIの研究開発分野と組み合わせ、連携し、新しい化学反応が生まれたら面白いと思う。
- SDGsプラットフォームは東邦銀行にも参画いただき、一緒にやらせていただいている。産学官金労言の各分野の皆様がプラットフォーム上で連携することを予定しており、SDGsの観点を切り口として当協議会と連携することも考えられると思う。
- Aチームは「会いに行く」というものだったが、葛尾の一般社団法人葛力創造舎ではインターン生やツアーで村内に学生を村の家庭に泊ませたりしている。学生さんたちが帰った後、もう一度来たいという方がかなり多い。Bチームに関しては、福島県が推進しているホープツーリズムとかなり近い。ホープツーリズムでも最後に学生たちに、これから考え続けていきたい課題や、この先自分が目指したい未来の姿を考えてもらう部分がある。あとホープツーリズムに関係のある団体に手伝ってもらえるのがいいのかなと思った。Cチームではアクティビティや民泊が出てきたが、浜通り地域にTATSUNO BASEというキャンプ場ができる。これから学生さんや社会人の方に来ていただいて、キャンプをしたり夜の星空を見たり、双葉町のだるまの絵付けをしたり、最近だと大熊町・双葉町・浪江町の3町で連携してサイクリングルートも作ったので、そういったことがこのアクティビティだったりするのではないか。お金を他のもので取って、民泊としてではなくただのキャンプとして使うということではできないのではないかと思った。
- お話を伺っていて、いろいろな方々との関わりを持てるのはやはりJヴィレッジだと思っている。私の中でも頭の整理をして、アイデアを出していきたい。この会議が絶えることなく、私どもが主体的になってやっていくことがベストだと思っている。

4 閉会

次年度は、実践の場で提案された3つのチームからの提案の視点やアイデアを活かしながら、プログラムの実現に向けて議論を進めていく方向性が確認された。実践の場に参加した学生・社会人の来年度のプログラムへの関与について検討を進めるとともに、プログラムの中で提供する福島県内での視察・体験等のコンテンツについて副代表団体等と引き続き情報交換を行いながら、次年度に向けた準備を進めていく。

以上